城下町柳川と北原白秋の見た風景

―場所論的考察―

荒木　正見

小論は、詩人北原白秋の見た風景を手がかりにして、福岡県柳川という一地域の本質的意味を探る試みの一環をなす。また、北原白秋について従来散文的に考察されてきたいくつかの側面を構造的総合的に結びつける試みでもある。

考察は、主に西田幾多郎の哲学的場所論から導いた方法を用い、比較論的に遂行する。小論は、このような哲学的場所論の文学研究や地域研究に対する応用可能性を探求する試みでもある。

なお、文中で使用する『抒情小曲集　おもひで』（著及装幀：北原白秋、明治四四年刊行）は、平成九年発行復刻版（財団法人北原白秋生家保存会発行）を引用し、角川文庫『北原白秋詩集』（平成一一年）を参照した。

また、文中引用の旧字は現代表記に直し、外国語のものは、拙訳を記した。

なお、この考察の前身は「北原白秋「わが生ひたち」と柳川の「風景」―現象学的考察―」（『文化とセラピー　こども音楽センター紀要　第一号』一九九一年、七一～八八頁）である。小論はその論理的考察の後半であり筆者の柳川考察の総合的な理論的背景を為す。紙数の関係上、小論は考察の大枠を記すにとどめ、その論文を執筆する準備段階からの二十年余にわたるフィールドワークの成果については殆どを割愛した。それらについては爾後、小論の大枠を基にして各論ともいう成果を公表する所存である。

1．西田幾多郎の場所論

さて、小論では西田幾多郎の場所論を応用して考察を進めるが、西田幾多郎の理論は本来多岐に亙り、単純に応用できないのも事実である。そこで筆者はこれまで、西田幾多郎の場所論の一端を筆者なりに整理した内容をもって考察を繰り返してきた。その内容を筆者は端的に、中村元監修、峰島旭雄責任編集『比較思想事典』（東京書籍、二〇〇〇年、四一二～四一三頁＝拙筆項目「場所［現代思想］」）において述べた。これまでも執筆の都合上、その内容については各論文で言及してきたが、以降の考察の手がかりとして概略しておく。

a．唯一・絶対・無限な存在としての場所。

西田幾多郎にとって、「場所」という語は、古来哲学のテーマであった「存在」そのものを指す。「存在」とは、唯一・絶対・無限な存在と、個々の存在（もしくは存在者）を意味する場合があるが、

西田幾多郎はまず、唯一・絶対・無限な存在を「場所」と呼ぶ。すなわち、「場所」はすべての個々の存在対象をその部分とする唯一のものである。古来しばしば呼ばれてきたように「神」と呼ばないのは、また、「存在」とさえ呼ばないのは、特定の先入観で定義してはならず、また、意識の対象であってはならないからである。言語的に名付けることを苦労した挙句、「ありか」とネガのように呼ぶのがぎりぎりの名付けにしたと考えられる。

b．場所の自己限定と個による場所の限定。

絶対的な全体と個の関係は、次のように述べることが出来る。

「全体としての場所は個を限定し、個は全体の表現や発展として場所を限定する。」

すなわち、絶対的な全体が個を生むのであるから、全体は全体的な構成によって個を限定するのであるが、生み出された個は、個として自己表現する。我々は絶対的な全体を一気に認識することは出来ないが、個々の存在（者）を通してそれらの無限な総体としての全体を認識する。その個が豊かであればあるほど、全体は豊かになる。このように、個は全体を限定し、全体と個との相互限定が成立することになる。

c．場所論における歴史的根拠。

さて、このように全体と個とは、相互に限定しあっているといえるが、それは静的なものではなく、脈々と動いていくものである。その動きの軌跡が歴史となる。従って「全体と個の相互限定のダイナミズムが歴史となる」と述べ得る。

d．歴史理論に基づく人間、社会解釈。

ここから、このような歴史理論に基づく解釈学の可能性が開ける。すなわち、「歴史における全体と個の相互限定のダイナミズムを解析すれば事柄の本質が見えてくる。」として、新たな解釈学の可能性を探り得る。

このような場所論の応用においては、場所を具体的、空間的な場所に置き換えても、相互限定のダイナミズムが成立する。この理論は最も普遍的な理論であり、普遍は特殊な状況に適用されなければ真の普遍とはいえないからである。また、場所は物理的空間ばかりを意味するわけではない。特定の人間でもよいし、抽象的な概念でもよい。また、歴史は、個人であれば生育史として捉えられる。あくまでその語によって表現された全体と、それに付随する個別的な事柄との関係として捉え得るものである。

以下、このような視点から、北原白秋その人の自己表現と、柳川という場所の関係を探っていく。手がかりは歴史である。

2．北原白秋「わが生ひ立ち」と水郷・柳川

北原白秋は、明治一八年（一八八五）一月に、当時の福岡県山門郡沖端村、現在の福岡県柳川市に生まれた。そして、明治三七年（一九〇四）に中学伝習館を中退して上京、昭和一七年（一九四二）に五七歳で没するまで、再び柳川に住むことはなかった。

しかし、白秋にとって柳川は魂の揺籃として、彼の作品の原光景を構成し、彼自身そのことを自覚し、そのことを作品制作に効果的に生かした。それを最も意識的に表現した一文が、明治四四年（一九一一）、二六歳の時に刊行した詩集『抒情小曲集　おもひで』に掲載された序文「わが生ひ立ち」である。

この、「わが生ひ立ち」で白秋は、「「思ひ出」は私の芸術の半面

である。」（復刻版、序一〇頁）と述べ、柳川の思い出が単なる郷愁を超えて芸術そのものを構成することを述べている。

そして、「私の故郷柳河は水郷である。さうして静かな廃市の一つである。」（復刻版、序一二頁）と、柳川の心象風景について語り始める。

小論ではまず、この、「水郷」と「廃市」とについて考察する。

ところで、風景とは、物理的風景と心理的風景とが統合したものである。それは歴史的に作られてきた風景と、そこで生きる人々に映る心理的映像との統合といってもよい。以下、このような視点から、柳川の水郷について考察する。

はじめの考察は、水郷の普遍的意味を求め、水郷という場所がいかに個を限定するかについて考察する。

水郷の心理的意味を捉える場合、はじめに重要な要素となるのは「水」である。J.E.Cirlot / Translated from the Spanish by Jack Sage, *A Dictionary of Symbols 2nd Edition.* (Routledge & Kegan Paul. 1971/1978) では、多くの例とともに、「水 water」は、「表面に立つ小さな鋭い波頭による波型」「原初的海もしくは原始的事柄」「無限や不死」「無意識の象徴としての流動する身体」(p.364-367) などと述べられている。また、Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery* (North Holland Pub. Co., 1974/1978) では、「混沌」「洗礼」「精神的再生」「大洪水のように世界の再生、新生」「若返り」「推移、過渡的段階」「浄化」「審判」「不安定」「順応」「苦しみ」「魂」などを現すと述べられている (p.493-494)。さらに、赤祖父哲二『英語イメージ辞典』(三省堂、一九八九年第四刷) では、Water 水は、大まかには「循環、清浄、母胎」を表すとされている (三五三頁)。

このように多様に述べられる水であるが、柳川のような水郷で、構造的にはいわば無意識としての水に、常に触れていることで様々な人格的刺激を受けることになる。

それらは、未知であり、不安であり、恐怖であり、本能である。また、新生であり、可能性でもある。それらは信仰を生み、ロマンを生む。

白秋も「折々の季節につれて四邊の風物も改まる。」（復刻版、序13頁）と、綿々と記すように、四季折々に、水と陸との豊かな対比が展開し、双方の生物や、景観が豊かに移り変わる。「わが生ひ立ち」ではこれらすべてについて数多く詳細に言及されている。このような水辺の四季折々が北原白秋そのひとを限定し、また北原白秋がかく文学的に表現することが、個の側からの場所に対する限定でもある。そのように懐かしく肉体の底から無意識を喚起する水辺の風景は、いわば慈しみ育む母親性だといえる。

これに対して、柳川の掘割の構図は、知恵を持ち、コントロールする父親性ともいうべき論理的性格を意味するといえる。

すなわち、柳川の場合、この水郷は城下町を形成する掘割でもある。構図的に重要なのは、旧城下と沖ノ端とによって構成される点である

場所の側からの普遍的な限定として、その地理的構図の考察が求められ、他方、地理的構図が成立する歴史的事実からは、普遍的な限定を加える地理的条件に柳川の人々の個性溢れる工夫と知恵が見え、その工夫がまた普遍となり、個人という個を限定し、個人は自己表現によって普遍を逆に限定するのである。

はじめに地理的構図は以下のように考察される。

まず、旧城下であるが、これは、城を中心として掘割が幾重にも取り囲む構造を示す。すなわち、今日の柳城中学校と柳川高校のあいだに本丸が存在し、すでに埋められたが、本丸、二の丸を囲む掘割、そしてこの一帯を中心として今日も残る黒門橋、日吉神社の南、お花の北などを巡る掘割、お花の南、辻橋、鶴味噌の西を巡る外堀などをはじめ大小さまざまな掘割が町を取り囲む。そして最も外側には総外堀として北に天然の沖ノ端川という水路を擁している。

このように、単に表面から眺めただけでも、柳川の掘割は、心理的にも、現実的にも、外からの侵入に対して内部を強く守る構造を示す。このことは、町並みの詳細を見ても言える事である。例えば、十字に交わる道はわずかである。甲木清『柳川の歴史と文化』（柳川の歴史と文化刊行会、昭和六〇年）には、十字に交わるのは辻町（札の辻）のみと記されている（一〇頁）。

さらに掘割は、枠組みを現すと同時に、その成立や管理を意識させ、コントロールや知恵をも意味する。つまり、この掘割の構図は意図的に作られたものであり、合理的な水路管理に基づくものである。

すなわち、沖ノ端川の二つ川（二ツ河）井堰から取水して、沖ノ端港へと流すことは容易ではない。高低差を考慮するのは当然だが、豪雨時にも溢れず、渇水時にも溜める知恵が必要であるが、その知恵の典型が沖ノ端の二挺井樋である。

最後に水が出て行くところが二挺井樋であるが、この井樋には、木製の弁が付けてある。この弁は豪雨時には浮いて水を流し、渇水時には栓となって掘割の水を確保する。故障の可能性を想定して二挺設置されたと考えられる。

すなわち、沖ノ端川の、柳川にとって東上流の二つ川（二ツ河）井堰から取水して、柳川中を巡らせ、沖ノ端の二挺井樋に落とし沖ノ端港へと流すこのような構図が意図的に作られたということは、合理的な考え方の反映であるといわねばならない。このような合理的論理的な考え方は柳川藩における和算の発達にその一端が示される。永井新著・中島政治編『柳川藩史料集』（青潮社、昭和五六年）には、柳川・高畑の三柱神社の算額や、数学漢学指南役となった野田楽山、幕末の数学者牛島五左衛門とその弟子森礼蔵、明治期の数学者柿原久保などが、柳川藩の和算を象徴しているとして紹介されている（五六八～五七一頁、五九二～六〇一頁、六一四頁、六三二頁）。

このように考えてくれば、掘割とその構図という風景からだけでも、内を固め、極端な変化を求めない気質と、文化の発達とが想像できる。それは歴史的には次のような事実として示される。

極端な変化を求めない慎重な気質は、例えば維新時の対応に示される。

『柳川藩史料集』によれば、安政四年（一八五七）、伊豆下田の米国総領事ハリスが数度幕府に登城することを願い出て初めて許可されたことを巡り、柳川藩主立花鑑寛（あきとも）は、それ以前に老中を訪れて真意を糾したり（四三八頁）、また、許可されてからは、他藩と共に現在の我が国は国防の充実が完全であるか、という建白書を提出したりした（四三八頁）。これは一因には、弘化三年（一八四六）に、藩主立花鑑寛が結婚によって幕府の中軸松平慶永の義理の兄になったこと（四三九頁）も想定される。しかし、すで

に尊王攘夷論が沸き起こる中で、傾きかけた幕府に近づくこと自体が保守的な印象を与える。このように、徒に時勢革新の先頭を走らず時流を観察してじっくり対応するのが柳川藩の傾向であるのは、初代藩主が苦労したことと無関係ではないと思われる。下記の略年表からも明らかなように、初代藩主立花宗茂は、天正一五年（一五八七）に豊臣秀吉に命じられて柳川城に入城したが、関が原の戦いで西軍に付いたために破れ、京都で浪々の身となる。次に、奥州南郷・棚倉地域を領有するが、中野等『立花宗茂』（吉川弘文館、二〇〇一年）によれば、京都のち江戸に滞在して徳川家康に対して柳川に帰れるようさまざまな働きかけを行ったと推測されている（一四一～一四三頁）。しかしその結果再入城が叶ったのは二代将軍秀忠の、元和六年（一六二〇）であった。このように再入城が認められることも異例だしそれが宗茂の優れていたことの証明にもなるが、再入城に向けて立花宗茂が最高権力者に対してどれほどの辛い働きかけをしたかは想像に難くない。

さて、内を固め文化の発達を招くことは歴史的には枚挙に暇がない。

文政七年（一八二四）に藩校伝習館が創設されたのはその典型であるが、他にも文化的濃度の高い風土が指摘される。

先に述べた信仰とも関連するが、町中どこに立っても見ることができる神社、仏閣、祠などと、それらにまつわる祭り、「どろつくどん」、や白秋も言及している沖ノ端水天宮の「三神丸」という船を飾り立て舞台に見立てたお祭り、各家々の雛飾りを見せ合う「さげもんまつり」など、そして一一月二日に亡くなった白秋を偲び一一月一日から三日まで水上パレードが行われる白秋祭も加わり大小の祭りが四季折々に展開する。

ところで、これまでの考察だけでは、柳川が如何にも進取の気性に欠ける印象を持ちかねないが、実際はそうではない。文化の発達を招く際には必然的に、文化的凝縮度を高めるための文物の導入が求められる。それを構図として表すのが、次に考察される沖ノ端と沖ノ端川である。

有明海の海水が逆流するほどの近さにある沖ノ端川とそこに流しだす水路としての沖ノ端港は、構図的には旧城下のまとまりを破るものとして現れている。後述する歴史を参照すればさらに明らかなように、それは外からの侵入や交流や変化を意識させる。沖ノ端川も同様である。沖ノ端川は地理的には八女の山々を水源としているだけに、海からだけではなく上流からも文物の流入を予測させる。

特に、北原白秋の生家はこの沖ノ端の商家であった。横尾文子『北原白秋』（西日本新聞社、平成六年）によれば、「平戸、五島、長崎、天草、薩摩あたりからの帆船が荷を降ろすその川端に、明治末年まで何棟もの酒蔵をそびえさせていた造酒屋」（一六頁）であったとされる。

城下町における意識性の高い価値観に影響されつつも、それを破るものとしての沖ノ端の商業、交易、漁業に携わる現実的、冒険的な価値観との双方が北原白秋を育んだことは、沖ノ端の地理的構図からも想像できる。『北原白秋』には、「船着場では絶えず市が立ち、塩魚、鯨、南瓜、西瓜、たまには鵞鳥、七面鳥まで取引され、かたわらでは旅芸人が手品をみせたりと、人の往来や物の売買や言葉つきには、城下町の威儀をただしたたたずまいとは異なり、独自の解放感に包まれていた。」（二〇頁）と賑やかな様子をまとめてある。

同様に沖ノ端川の上流にも交易の要地が出現した。なかでも出ノ橋（井手橋）周辺は、その最たる場所であった。

今日フィールドワークを行うと、間口を狭く奥行きを深く取った典型的な商家建築の目野邸や、枡形、構口などと呼ばれる鍵型になった路地などが見受けられる。文政八年（一八二五）から天保七年（一八三六）頃にかけて西原一甫によって記された『柳河明證図会』では、壮麗な井手ノ橋御門と、材木置き場、商家などの賑わいが描かれている。

ここで、柳川城、城下町、掘割の形成について、永井新著・中島政治編『柳川藩史料集』（青潮社、昭和五六年）所収の年表（七八五～七九八頁）を参考にして纏めておく。

文亀（一五〇一―四）頃、蒲池治久、社村（日吉神社付近）に出城築城。

永禄（一五五八―七〇）頃、治久の孫鑑盛（あきもり）ほぼ現在地に築城。

天正九年（一五八一）、鍋島信生（のぶなり＝後の直茂）入城。

天正一二年（一五八四）、龍造寺家晴（家治）入城。

天正一五年（一五八七）、立花宗茂入城。

慶長五年（一六〇〇）、城番加藤美作。

慶長六年（一六〇一）、田中吉政入城。築城技術に優れる。

元和六年（一六二〇）、城番松倉重政。

元和六年（一六二〇）、再度立花宗茂入城。

明治二年（一八六九）、立花鑑寛（あきとも）版籍を奉還、柳川藩知事に。

明治四年（一八七一）、廃藩置県。立花鑑寛、華族に、知事免職、東京へ転居。

明治五年（一八七二）、柳川城炎上。

この具体的な歴史が物語るのは、柳川城築城、城下町や掘割の形成のいずれもが、朝夕に出来上がったのではなく、代々の藩主が受け継ぐかたちで成立してきたということである。その長い時間の間に知恵が磨かれ、今日に至る合理的に洗練された柳川の掘割の構図が出来上がっていったといえる。そして、これまでの考察を省みれば、そのようにして出来上がっていった柳川旧城下、沖ノ端という複合的な構図が成立することでまた、そのような構図が喚起する精神的風土がいっそう形成されていったのである。

3．北原白秋「わが生ひ立ち」と廃市柳河

ところで、北原白秋が柳川を称する言葉でさらに特徴的なのは「廃市」である。「既に柳河の街を貫通する数知れぬ溝渠（ほりわり）のにほひには日に日に廃れてゆく旧い封建時代の白壁が今なほ懐かしい影を映す。」（復刻版、序一二～一三頁）と述べられる廃市であるが、後に作家福永武彦の小説の題になるように、一見ロマンチックな雰囲気をも感じさせるこの「廃市」という言葉に白秋はどのように到達したのだろうか。先の考察に重ねる形で、この「廃市」について考察する。この場合も手がかりは歴史である。明治一八年に生まれた北原白秋が出会った柳川の一つが掘割であったとしても、掘割の上に成り立つ柳川の風景はどのような姿だったのだろうか。

明治時代に入ってからの柳川の歴史は『柳川の歴史と文化』（二六～二七頁・二六五～二六七頁）を参考にして、以下のように示される。

明治四年（一八七一）七月、廃藩置県。柳河県。
明治四年（一八七一）一一月、三潴県。柳河支庁。
明治五年（一八七二）一月、柳川城炎上。
明治五年（一八七二）、瀬高門、出ノ橋門、辻門などの門全てを公売。
明治五年（一八七二）三月、三潴県庁を若津町から西久留米両替町に移転。
明治六年（一八七三）、旧柳川城郭の建物、石垣などを陸軍省から大蔵省に処分すべく引渡し。
明治六年（一八七三）、柳河支庁を廃する。
明治八年（一八七五）、三潴県庁に旧柳川城、城塁の払い下げ。残存していた櫓を破壊し、石垣などとともに、堤防決壊の復旧に新開地に埋める。
明治八年（一八七五）、柳川城址、民間に払い下げ。
明治九年（一八七六）、三潴県を廃し、福岡県に合併する。

以上の事実が物語るのは、柳川が次第に行政の機能を失っていく姿である。そこから派生する風景としての特徴は、官僚としての武士が町を去り、武家屋敷が次々に廃屋になっていく姿である。あるいは焼失し、また、公売にかけられた遺構は、新開地開拓のため、有明海の埋め立てに使われた。明治八年の堤防決壊の復旧などはその典型である。沖ノ端の商家や漁師町は、あるいは海外貿易に乗り出し、あるいは販路を広げたが、やはり身近な消費者を失った経済的痛手は大きかった。

柳川は育ち行く白秋の目の前で、廃屋を増し、文字通り「廃市」と化していったのである。白秋は「アセチレン瓦斯を点け、新たに電気燈（でんき）をひいて見たところで、格別、これはといふ変化も凡ての沈滞から美くしい手品を見せるやうに容易く蘇らせる事は不可能であらう。」（復刻版、序一九～二〇頁）と、絶望的なロマンを掻き立てるのである。

4．北原白秋の南蛮趣味と柳川

次に指摘されるのが、北原白秋の南蛮趣味である。これも先の考察に重ねて考察する。

白秋において南蛮趣味は通説では「五足の靴」（明治四〇年・一九〇七・二二歳）によるとされるが、白秋自身が「私の異国趣味は稗い（をさない）時既にわが手の中に操られた。」（復刻版、序三八頁）と述べているように、その背景が柳川にあると考えられる。

先に述べたように、沖ノ端は心理的には求心的な旧城下の枠組みを破るものであったが、実際にも国内外に対する出入り口としての発展可能性を辿る歴史を持っている。それを歴史的事実の一端から考察する。

『柳川の歴史と文化』にまとめられているように（一二～一五頁）、柳川藩は大坂の常安橋に大坂倉屋敷を持ち、長崎の浦五島町に柳川藩米倉を持って廻米を送っていたが、同時に国内各港に廻船を派遣し産物の交易に力を入れた。

さらに、元禄頃（一七世紀末）には櫨運上（櫨税）制度を設けた。実質的にこれは鎖国中にも関わらず海外貿易を遂行するきっかけとなった。すなわち、櫨から晒し蝋を作り、長崎米倉に送り、幕府長崎奉行を通してオランダに売る。藩や長崎奉行の手数料を差し引いて商人の利益となったのである。

他にも、元和九年（一六二三）に豪商後藤七郎左衛門が安南、カンボジアに航海。寛政十二年（一六三五）に鎖国令が出たにも関わらず、寛文七年（一六六七）には商人江口吉右衛門が禁を犯して海外へ行き死刑になったとされている。柳川にはこれほどまでに海外が身近な風土が江戸時代以前からあった。

このような開かれた気風に関して、軍事的には沖ノ端川下流は水軍基地でもあった。一七世紀には御船方がすでにあったが、嘉永六年（一八五三）に幕府が大船製造の禁を解くと、早速柳川藩も大兵船を作る。本来、御船大工頭の芳司（ほうじ）家が軍船・商船製造の目的ですでに元和六年（一六二〇）大坂から来柳し、代々、大船製造技術を伝えていたのである。

また、柳川藩は長崎警備、すなわち長州以西の諸藩の義務として長崎に人材を派遣していたが、距離の近さもあって、それが有力な西欧文化の入り口となった。あまつさえ、長崎代官に柳川の人村山氏を送り込み、さまざまな便宜を図ったことが古文書（唐・紅毛商売之控など）に見える。

これらもろもろの状況によって、柳川には西欧文化が自然に流れ込んでいたといえる。感じ易い白秋の原体験にこのような西洋文化が根付いていたといえる。

5．方法としての場所論

このように、方法として場所論を生かす試みは、それまで偶発的恣意的に歴史や生育史を辿ってきた諸学に、総合的合理性に基づく思考を補うことになる。

小論の場合も、柳川という特定の場所ながら、その場所の持つ普遍的な意味の側面を、北原白秋という感受性豊かな詩人の目を参考にして、地理的、歴史的、またシンボル的に探り、それらによって構成されてきた北原白秋そのひととその作品の意味を求める試みを行った。その結果、それまで概念的でしかなかった柳川と北原白秋の本質的意味が統合的に示されるに至ったのはすでに考察してきたとおりである。

もちろん、はじめに方法ありき、の危険性をも認識しておかねばならない。シンボル的解釈に典型的に指摘されるように、その方法だけが独走すると、対象は個性を失い、普遍の型をなぞるだけに堕ちてしまう。その危険性を避けるためには、場所論の原点、すなわち、場所は本来唯一絶対無限な存在そのものであり、個もまた、無数に存在するのだということを肝に銘じなければならない。その意味でこの考察は、柳川に対しても、北原白秋に対しても、単に僅かの側面を論じたに過ぎない。小論冒頭でも述べたように、今後、いっそうの調査、考察を積み重ね、公表する所存である。

また、場所論という理論面でも、一層の理論的構築が望まれる。それは、理論の性格上、単に机上の議論を積み重ねるのではなく、小論のような具体的実践を射程に入れた研究姿勢が求められる。このような、考察実践例を真摯に遂行し、今後ともいっそうの理論的構築を果たさねばならないであろう。

（あらき　まさみ・福岡歯科大学医療人間学講座教授）

参考文献

『抒情小曲集　おもひで』（著及装幀：北原白秋、明治四四年刊行＝平成九

年発行復刻版、財団法人北原白秋生家保存会発行）
『北原白秋詩集』（角川文庫、平成一一年）
「北原白秋「わが生ひたち」と柳川の「風景」　―現象学的考察―」『文化とセラピー　こども音楽センター紀要　第一号』一九九一年
中村元監修、峰島旭雄責任編集『比較思想事典』（東京書籍、二〇〇〇年、四一二～四一三頁＝拙筆項目「場所［現代思想］」）
J.E.Cirlot / Translated from the Spanish by Jack Sage, *A Dictionary of Symbols 2nd.Edition.* Routledge & Kegan Paul. 1971/1978
Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery,* North Holland Pub. Co., 1974/1978
赤祖父哲二『英語イメージ辞典』三省堂、一九八九年第四刷
渡辺村男『旧柳川藩志』青潮社、昭和五五年（昭和三一年刊行の復刻版）
永井新『柳川藩史料集』青潮社、昭和五六年
甲木清『柳川の歴史と文化』柳川の歴史と文化刊行会、昭和六〇年
西原一甫『柳川明證図会』天保七年（一八三六）
横尾文子『北原白秋』西日本新聞社、平成六年
中野等『立花宗茂』吉川弘文館、二〇〇一年

小論は、筆者の以下の講演と学会発表の内容を、論文として再構成したものである。

①「柳川の場所論　―城下町柳川と白秋の見た風景―」日仏景観会議「柳川会議」第3回プレ・ワークショップ講演会、柳川市・柳川総合保健福祉センター水の郷、二〇〇六年一〇月一五日

②「北原白秋における柳川　―場所論的考察―」比較思想学会研究例会、東京・大正大学、二〇〇六年一二月九日